

コロナ禍とそれ以降4年間の学校運営 —令和2年度から令和5年度の実践—

前サンホセ日本人学校 校長 川上 隆

キーワード 学校運営、遠隔授業、現地理解、国際理解

赴任校の概要（2023年6月1日現在）

学校名：サンホセ日本人学校（コスタリカ共和国）

現地表記：La Escuela Japonesa de San José

URL：<http://www.escuelaj.com>

児童生徒数：小学部 11人 中学部 2人

1 はじめに

(1) 中南米の楽園 ～平和の国～ ¡PURA VIDA!

コスタリカは東西をカリブ海と太平洋に囲まれた自然豊かな国で、地球上の全動植物の約5%（50万種）が生息している。ナマケモノや、手塚治虫が描いた「火の鳥」のモデルともいわれるケツァールなど、珍しい生き物が数多く観察できる生物の楽園で、国土の四分の一が国立公園や自然保護区である。

エコツーリズムも盛んで、国内電力の約98%を再生可能エネルギー（水力、風力、地熱等）で賄う世界有数の環境立国である。

1949年に軍隊を廃止し、83年には非武装中立を宣言した。軍隊を保有せず平和主義を貫き、「教育」「社会福祉」「自然保護」を三大政策として掲げている。公用語はスペイン語で、国教はキリスト教（カトリック）である。本校の位置する首都サンホセは、海拔1100m以上の高地にあるため、平均気温は年間を通して20度台半ばで、「常春」と呼ばれる快適な環境である。熱帯に属しながらも、運動をしないかぎり汗をかくことなく暑くない。朝晩は肌寒さを感じて、長袖が必要な時期もあるほどである。

(2) シニア派遣に向けて

定年退職2年前、私は退職後の仕事にシニア派遣を選んだ。現職教諭時に在外派遣（パキスタン共和国、カラチ日本人学校）を経験し、再度在外での勤務を希望していたことが最大の理由である。たまたま文部科学省のHPでシニア派遣が退職2年前から受験できることを知り、試しに平成30（2018）年に受験し、翌平成31（2019）年2月に合格通知をいただいた。その年（令和元年）の12月に赴任先がサンホセと決まり、翌令和2（2020）年1月に東京で1週間の宿泊研修を受け、3月末に定年退職し、4月からの赴任を楽しみにしていた。

ところが、3月頃から世界的なコロナ禍となり、派遣直前に飛行機が飛ばなくなった。やむなく赴任待機となり、4月からZoomによる在宅勤務が始まった。

そこで以下、私の任期4年間の学校運営について、年度毎に報告する。

2 令和2(2020)年度から令和4(2023)年度までの学校運営

(1) 令和2(2020)年度 (令和2年4月1日～令和3年3月31日)

当初はすぐに赴任できるだろうと思っていたが、コロナ禍で飛行機が飛ばず、結局年明けまでの約9ヶ月間が在宅勤務となった。中南米では同期のメキシコ組(アグアスカリエンテス日本人学校とグアナファト日本人学校)は予定通り4月に赴任し、その後、秋以降にリオデジャネイロ日本人学校(ブラジル)とリマ日本人学校(ペルー)が赴任し、私だけが取り残された気持ちになり、不安が増す辛い毎日だった。

日本とコスタリカは時差が15時間あるので、月曜日から金曜日の夜10時(サンホセは月曜日から金曜日の朝7時)からZoomでつなぎ、子どもたちと顔を合わせて仕事が始まる日々だった。サンホセも年内はコロナ禍で休校が続き、子どもたちも各家庭からつないでいた。

幸いしたのは、その前年(2019)度から始まった文部科学省指定のAG-5研究(ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発)だった。この予算で校内のICT環境が整備され、子どもたちも1人1台の端末(iPad)が利用できるようになり、日本の学校が大変な状況だったコロナ禍の4月当初からスムーズに遠隔授業がスタートできた。日々の遠隔授業や他国の日本人学校との合同遠隔授業がこの研究の実践的な研修の場となり、教員も子どもたちもICTスキルが格段に向上した。

年が明けて令和3(2021)年、学校は登校可能となり、1月6日に3学期の始業式と令和2年4月にできなかった入学式を実施したが、私は自宅から遠隔参加で、赴任できたのは9日後の1月15日だった。初めて子どもたちと対面できたことや、歓迎の歌とダンス(リンダコスタリカ)で出迎えてくれたことに、とても感激したことを覚えている。ただ、それから2か月で令和2年度が終了し、任期1年目は中途半端な感じがした忘れられない年となった。

(2) 令和3(2021)年度 (令和3年4月1日～令和4年3月31日)

任期2年目の令和3(2021)年度も5月半ばからコスタリカ政府の指示で休校となり、1学期の約半分35日間(71日中)が遠隔授業となったが、前述の通りスムーズに切り替えることができた。

AG-5研究は最終年を迎え、担任を中心に研究を進め深めることができ、とても有意義な経験となった。共同研究校だったメキシコのアグアスカリエンテス日本人学校とは各学年で連絡を取り合い、日常的に遠隔授業を行った。また、他国の日本人学校や日本からの外部講師等による遠隔授業も行い、教科横断的な学習を展開することもできた。子どもたちも他校の同学年の子どもたちと意見交換をしたり、一緒に学べることに喜びを感じたのか遠隔授業を楽しみに準備するようになり、学習意欲も高まった。この様々な形態の遠隔授業が、小規模校である本校の特色ある教育の一つとなった。

ただ中心となって取り組んだ3年目教員4名が帰国となり、残った私と次年度の教務主任の2人が新たに赴任する教員に引き継ぎ、継続(発展)させることが課題となった。

この年も校内ではコロナ禍の影響は相変わらず収まらず、感染症対策のマスク着用は続き、異国の地にありながら対外的な交流行事は全くできなかった。子どもたちにとっても、物足りない1年だったことだろう。

(3) 令和4(2022)年度 (令和4年4月1日～令和5年3月31日)

任期3年目の令和4(2022)年度は、新派遣教員が4名赴任し、派遣教員6名でスタートした。AG-5研究は終了したがその流れを引き継ぎ、他校との遠隔授業を続けていくことにした。交流校はアグアスカリエンテス日本人学校、パナマ日本人学校、アスンシオン日本人学校(パラグアイ)の3校だが、初めて経験する教員も多

く、無理せず継続していくことに主眼を置いた。

校内では1学期にマスク着用もなくなり、2学期以降少しづつコロナ禍の影響も薄れていき、本来の学校行事ができるようになってきた。前年度途中で中止になった水泳学習、長年続いていた現地私立校との3年ぶりの交流授業の再開（1学期）、全校での1泊2日の宿泊学習（2学期）、本校での日本人会との合同大運動会（3学期）と、本来の学校の姿に戻る兆しが見えた年だった。ただ、コロナ禍以前の学校行事等の引き継ぎが、先輩教員が帰国したことで後輩教員へ対面でできなかったもので、過去の文書や写真を参考にしながら、今いる教員たちで新たに行事を作っていくという感覚だった。

ところが2学期に入り、任期短縮教員が1名出て、2学期末で帰任することになった。替わりの教員の派遣はもちろん無く、残った教員たちで3学期を乗り切ることになった。しかし担任の授業持ち時数をこれ以上増やすことは物理的にできず、担外の教務が担任に入り、教務と私でその2学年（複式学級）の授業を担当することになった。それでもカバーできない部分は、他学年の時間割を変更して対応した。ただ、教務が担当する国語と私が担当する算数の授業は複式授業となり、その経験も無く授業の進め方に苦慮した。そこで学習支援員として私の妻にも授業に入ってもらった。教務や私がある学年の授業をしているときは、もう一つの学年に与えた課題を妻が見るという形で授業を進めた。また、教員たちにも精神的な負担が増え、かなり辛い3学期だった。そして、一番迷惑を被るのは子どもたちである。事情は様々だと思うが、赴任した以上は任期を全うすることを第一に心がけていただきたい。

私は任期3年目を迎えたとき、現地での生活が1年3ヶ月あまりだった。このまま3年の任期を終えて翌年帰国することを考えると、コロナウイルスの影響が大きいとはいえ、何もできていないまま帰国したくないという思いが強まった。それは赴任前の目標であった、現地での3年間の勤務ができないことも大きかったと思う。私は赴任前に3年間の見通しを立てた。それは、1年目は「出会い」、2年目は「つながり」、3年目は「引き継ぐ」というものだった。そこで、学校運営委員長さんに任期延長をお願いして許可をいただき、文部科学省に申請して4年目を迎えることができた。

(4) 令和5（2023）年度（令和5年4月1日～令和6年3月31日）

任期4年目の令和5（2023）年度当初は、最後の1年間で何ができるのだろうか、と焦りや落ち着かない不安があった。ただ、学校生活が始まるとコロナ禍の影響はほとんど収まり、本来の学校の姿に戻ることができ、対外的な行事や現地との関わりが多く持てるようになった。大使館やJICAの方々から外部講師として授業をしていただいたり、短期留学でコスタリカにきている大学生達がボランティアで授業に入ってくれたりした。前年度から続いていたアスンシオン日本人学校との合同遠隔授業も、学年によっては毎週定期的に遠隔授業を持つことができた。年度の総まとめである2月の学習発表会に向けての現地理解学習にも、各学年が積極的に外部との関わりを持つことで充実度が格段に上がった。

特に、2学期始めに現地理解学習に向けた職員研修旅行（1泊2日）が実現できたことは大きな成果だった。きっかけは、毎年10月に行う本校の開校記念日講演会に、ご講演いただいた国立コスタリカ大学大学院博士課程で研究する日本女性ASさんを通して、コスタリカ大学大西洋校からコスタリカの先住民族（カベカル族）のお話をいただいたことからだった。カベカル族は、スペイン語とは全く違うカベカル語を話す独自の文化を持っており、カベカル族が住む地域の学校が、コスタリカ教育省の教育課程と共にカベカル文化の継承も担っている。異国の地で日本の教育をしている本校に興味関心があるとのことだった。本校にとっても

現地理解教育を進める上で願ってもないお話だったのでお受けすることにした。

そこで、まずは我々が現地視察（1泊2日）を計画し、大西洋校のご協力でパナマに近い南部チリポ山系に住むカベカル族の小学校（幼稚園併設）を訪ね、子どもたちとも交流した。その後、反省会で大学側と今後の交流活動計画を確認した。11月、大西洋校のカベカル族教員養成課程の大学生数十人が大学の先生方と本校に来校し、授業参観と子どもたちとの交流会を持った。我々教員との交流会も計画していたが、子どもたちとの交流会が盛況で時間が取れなかった。また、訪問したカベカル族の小学校の校長先生も本校に興味を持たれ、2月にコスタリカ大学の先生方と視察（参観）に来られ、子どもたちとも交流した。その後、教員との交流会もを持った。このように素晴らしい出会いができ、繋がれたことをきっかけとして、これからの本校独自の現地理解学習が発展していくことを願っている。



大学生と子どもたちとの交流会



カベカル族の校長先生との交流会

3 おわりに

全海研（全国海外子女教育国際理解教育研究協議会）の滝 多賀雄会長が、「国際理解教育を切り口として、グローバル人材を育成する」とお話しになったことがあるが、私も同じようなことを考えている。

異国の地にある在外教育施設だからこそ、その地を活かしたその学校独自の現地理解学習ができるのではないだろうか。私が任期を延長したのもコロナ禍で現地との関わりが全く持てず、現地理解が進められなかったことが大きい。現地理解を進めることが、自国日本を振り返らせることになり日本人としてのアイデンティティーを高めていく。そしてその取り組みが国際理解に繋がり、グローバル人材を育てていくと考える。

振り返れば短かく感じる4年間だったが、異国の地という環境で教育という仕事をさせていただけたことに感謝すると共に、この貴重な経験をシニア派遣として誇りにも思っている。